

(実践報告)

## 伝統的言語文化としての長崎方言から地域の歴史文化への 理解を深め国語力を高める中学校国語授業の研究

前田桂子, 平瀬正賢 (教育学部)

山田喜彦, 北村由紀, 川淵正昭, 山中典希 (附属中学校)

### はじめに

昨年に引き続き平成 29 年度も、教育学部研究企画推進委員会より助成を受け、「伝統的言語文化としての長崎方言から地域の歴史文化への理解を深め国語力を高める中学校国語授業の研究」というプロジェクトを立ち上げた。参加メンバーは、教育学部国際文化講座准教授前田桂子、同初等教育講座准教授平瀬正賢、同附属中学校教諭山田喜彦、川淵正昭、北村由紀、山中典希の 6 名である。本稿は、本プロジェクトの一年間の実践報告である。

### 1 プロジェクトの趣旨

平成 28 年度は、「通史的視点による長崎方言をとり入れた郷土愛と国語力を育む中学校国語授業の新規的研究」というテーマで、方言学習を通じて郷土愛を育み、郷土の言葉が都のことばから来た由緒正しいものであることを知り、郷土の歴史と古典の学習に繋げることを目標にして取り組んだ。その中で、現代の中学生の方言理解の実態が明らかとなり、また同時に授業を通じて郷土の方言を知ることが、歴史文化に対する興味を喚起するのに有効であることが分かった。また、これから学ぶ古典文法の導入としても理解を深めることができたようである。さらに、テーマを各自で設定して書いたレポートでは、自分のことばが通じなかった経験から、世代差や他地域との違いを知ることで自身のアイデンティティを探ろうとする中学生の姿勢が浮き彫りとなった (教育実践総合センター紀要第 16 号)。

そこで今年度も「伝統的言語文化としての長崎方言」をテーマに掲げ、本学部の日本語学、国語科教育の専門家と中学校教諭が連携し、方言教育のあり方と有用性について考察した。具体的には、以下の手順を踏んだ。

- ① 調べ学習のための方言の参考書及び IC レコーダーを中学校に配置する。
- ② 附属中学校で 11 月に方言の授業を実践し、知識を身につけ理解を深める。
- ③ 生徒自身が設定したテーマに沿って、個々人で調査レポートを作成する。
- ④ 12 月の長崎大学国語国文学会で前田、平瀬、北村のパネリストによるシンポジウムを実施する。

### 2 附属中学校での調べ学習環境の整備

昨年度も方言の資料として、方言一般について説明した書籍を中心に購入したが、調べ学習のためには冊数が足りず、十分ではなかった。そこで今年度は冊数にも配慮し、方言地図や大型の本を始め、分かりやすい説明のものを多く取り入れた。また、長崎方言で書かれたマンガなども多く設置し、客観的に方言を観察できるように準備した。さらに、祖父母の音声を録音して調べたいという生徒の要望に応え IC レコーダー 6 台も準備した。購入書籍は以下の通りである。

- 1 『北部九州方言における方言新語研究』陣内正敬 九州大学出版会
- 2 『学校では教えてくれないゆかいな日本語』今野真二・河出書房新社
- 3 『方言を救う、方言で救う』小林隆・ひつじ書房
- 4 『どうなる日本のことば』佐藤和之・大修館書店
- 5 『坂道のアポロン 全 9 巻』児玉ユキ・フラワーコミックス
- 6 『誤解されやすい方言小辞典』篠崎晃一・三省堂
- 7 『大方言。』わぐりたかし・ピア
- 8 『まんがと声で楽しむ福岡弁』薙澤なお・マイクロマガジン社
- 9 『方言風土記』杉本つとむ・雄山閣
- 10 『ペコロスの母に会いに行く』岡野雄一・西日本新聞社
- 11 『ペコロスの母の玉手箱』岡野雄一・朝日新聞社
- 12 『ペコロスの母の贈り物』岡野雄一・朝日新聞社
- 13 『蝸牛考』柳田国男・岩波文庫
- 14 『全国アホ・バカ分布考』松本 修・新潮文庫
- 15 『方言は絶滅するのか』真田信治・PHP 文庫
- 16 『新日本言語地図』大西拓一郎・朝倉書店
- 17 『方言と地図』井上史雄・フレーベル館
- 18 『調べてみよう暮らしのことば (全 7 巻)』井上史雄・ゆまに書房
- 19 『ひと目でわかる方言大辞典』篠崎晃一・あかね書房
- 20 『現代若者方言詩集』浜本純逸・大修館書店

### 3 平成 29 年度授業実践

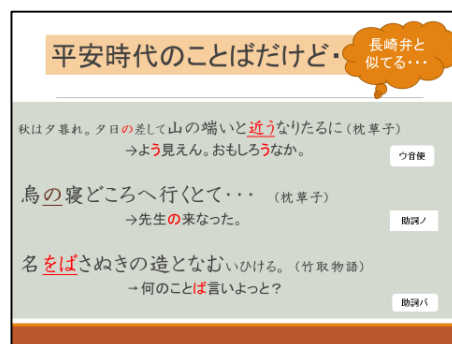
今年度は、平成 29 年 11 月 14 日午前 10 時より 1 時間、附属中学校の多目的ホールにおいて、附属中学 2 年生全員を対象に、「長崎弁から考える～方言の謎～」と題する授業を行った。

まず、附属中学校が今年度採用している国語の教科書である『伝え合う言葉 中学国語②』(教育出版)に方言の解説が掲載されていることを確認した。その上で、報告者の本時の授業が方言全体に関する内容と、長崎方言を取り上げたものであることを述べ、方言の印象などを聞いた。

附属中学校の生徒は授業を通じて興味を示し、具体的な語形を挙げると、面白がったり、感心したりと、活発な反応があった。

まず授業の導入で、既習の古典作品の文章と長崎方言との類似点を挙げたスライドを示した(シート 1)。長崎方言の文法的な特徴として、

- ・形容詞連用形のウ音便
- ・主格の助詞ノ
- ・対象の助詞バ
- ・打消の助動詞ン



シート 1

- ・比況のゴト
- ・終助詞バイ、タイ
- ・動詞二段活用

などがある。独特の言い回しとっていたものが、日本語の歴史と対照させることで実感が湧いたようであった。

次に、方言の伝播として有名な理論である「方言圏論」を「カタツムリ」と、「バカ」を使って説明した（シート 2）。本授業は、方言の基礎的知識を学習した生徒が自らの視点で、方言に関する資料やアンケート、聞き取りなどの方法でレポートを作成し、発表するのが最終目的である。テーマは自由であるが、昨年度のレポートを見ると、自らの方言が他地域の方に通じなかったという経験が動機となったテーマが多かった。そこで今回も方言と地域的広がりという観点から「方言圏論」をはじめとする伝播の例をいくつか紹介し、ことばの伝わり方が一様でないことを伝えた。さらに、気づかない方言など、普段意識しないものを例示した。

「方言圏論」は、昨年の授業でも生徒が大変関心を持った話題である。昨年度は一部の語に見られる現象として紹介したつもりだったが、魅力的な理論のためか、生徒の反響が大きく、様々な語を当てはめて、予想通りの結果にならないことに戸惑う生徒が多数見られたので、全ての語に当てはまるわけではないという点にも注意して説明した。

長崎は外来文化との接触による独特の方言形が見られる地域である。これは江戸時代の長崎が全国で唯一、西洋文明との接点であったこと、市内に外国人が居留していたことの影響関係があることを話した。

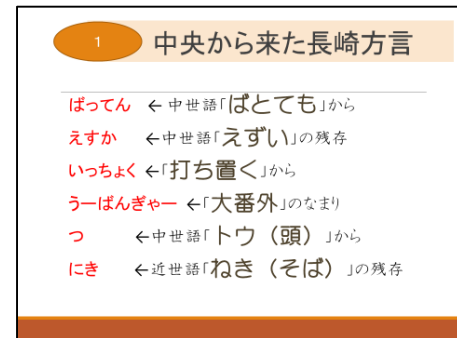
シート 3 は、いくつかの方言語彙の成立を述べたものである。方言語彙が地域で単独にできたのではなく、中央語が様々な形で残ったものであることを説明した。また長崎の伝統文化である「おくんち」や「精霊流し」に息づく方言を説明した。お祭りの出し物にもオランダや中国の文化的影響が色濃いが、掛け声のルーツを辿ると江戸時代に伝わった中国語に由来するものがあることを述べた。

最後に、現在の方言使用の世代差を示すアンケート調査結果を提示した（シート 4）。現代の若者と中高年層では、使用する方言の量が約半分に減少しており、長崎方言の代表的存在であるバッテンでさえ、使用する中学生は半数以下であることを述べ、今後の方言について各自予想を促すとともに、方言に関するテーマを設定し、レポート作成を課題とした。

本プロジェクトでは、長崎方言の由来を知ることによって近隣とのつながりや歴史的背景を理解することで地元愛と言葉の感性が育まれることを期待している。

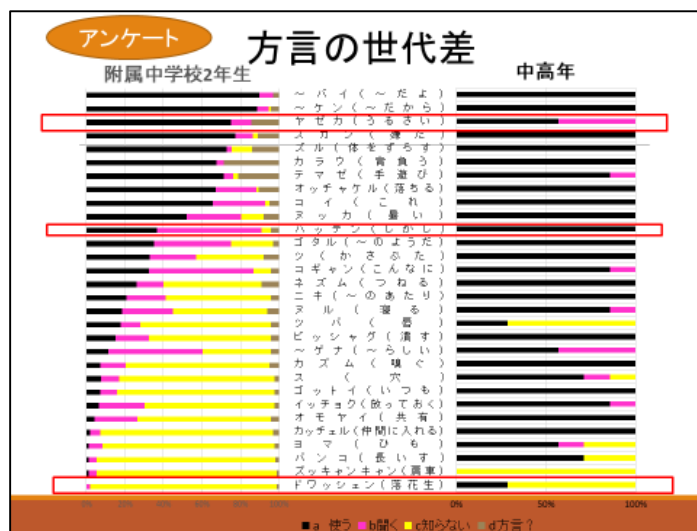


シート 2



シート 3

また調べ学習に取り組むことにより、まとめ、発表する能力も身につく。今後、生徒がどんな点に興味を持つか、どういう面に光を当てると効果的かなどを知るためにレポート分析を行う予定である。本実践報告書を執筆している現段階では、今年度のプロジェクトは進行中である。生徒の自由な発想のレポートに期待しているところである。



シート 4

今後、本プロジェクトは伝統的言語文化としての方言教材をまとめ、方言教育の長崎スタイルを提案することによって、県内の国語教育の向上につなげることを目指している。

#### 4 平成 29 年度長崎大学国語国文学会におけるシンポジウム

平成 29 年度は、昨年度のプロジェクト成果を踏まえ、長崎大学国語国文学会（平成 29 年 12 月 2 日開催）においてシンポジウムを実施した。テーマは「国語の授業における方言教育」で、教育学部准教授前田桂子、同平瀬正賢、教育学部附属中学校教諭北村由紀がパネリストとなり、次の 3 つの視点で発表を行った。

- 4-1 方言意識の変遷と、方言使用の実態について(前田桂子)
- 4-2 国語科教育における方言の学習指導(平瀬正賢)
- 4-3 附属中学校における授業の実践報告(北村由紀)

当日は質問シート形式を採用した。会場からは各発表者に対して活発な質問があった。以下、各発表要旨を掲載する。

##### 4-1 方言意識の変遷と、方言使用の実態について（前田桂子）

###### I はじめに

本発表では、明治以降現代までの方言意識の変遷と、方言使用がどのように変化したか、という歴史に触れ、長崎地方の実態について述べる。

###### II 方言意識の変化

まず、方言意識の歴史に関して、東條操は方言研究には三度の山があるという。（東條操 1957「方言のあゆみ」）。

- ① 明治 35 年（1902）以後の国語調査委員会を中心とする方言全国調査
- ② 昭和 3 年以後東京方言学会等の学会が結成され、雑誌「方言」発行

### ③ 昭和 23 年に設置された国立国語研究所を中心とする地方語の研究

「国語」という概念ができたのは明治時代であり、近代日本が帝国として歩む過程と不可分であった。従来、文章語としては日本全国共通の文体がある一方で、話し言葉には全国に通用する「共通語」はなかった。そこで明治政府は、上田万年らに、統一国家として全国民に通じることば「国語」を作らせた。そしてそれと同時に「方言」という異変種を排除するという動きもあった。保科孝一の『国語教授法指針』1901年には、「方言の発生は止むお得ない」「こ一分裂した国語でわ、教育の一大目的たり、国民的精神の発達お期することわ六かしい…一日もはやく標準語お制定し、これによって、全国の方言お統一して、教育の発達お計ることが、刻下の急務である」などの記述がある。つまり、方言は全国統一語の教育には邪魔だという意識である。

そして国語調査委員会による「口語法」「口語法別記」の編纂によって標準語が完成し、明治三七年（1904）に「国定国語読本」が全国の小学校で使用されるようになると、標準語教育が進む。その一方で方言矯正が行われることも多かった。沖縄における方言札の存在はよく知られているが、長崎県でも方言には消極的であったようである。保科孝一『国語教育』二五卷七号（1940）によると、長崎県の小学校教諭のことばとして「国語読本を中心とする言語の純化統一」「正しい言語生活を営む次の社会力を形成する児童を教育しなければなりません」「『国語を尊べ、国語を愛せよ。国語こそは、国民の魂の宿る所である』この信念に生きて、方言訛音矯正に対するやむにやまれぬ熱を以て、滅私奉公、教育報国の実を挙げ」などということばが紹介されている。

戦後はこの風潮も変化を見せる。柴田武 1958『日本の方言』では、当時の薄れつつある方言を惜しみ、「方言の復権」が言われ出した様子を述べている。

では現代はどうか。現代は、若者が新たに「新方言」を生み出す一方で、消滅危機にある言語として日本語の方言がユネスコで認定されている状況である。

また、国語審議会の方言認識も、

- 方言は地域の文化を伝え、地域の豊かな人間関係を担うものであり、美しく豊かな言葉の一要素として位置付けることができる。「方言の尊重」とは、国民が全国の方言それぞれの価値を認識し、これらを尊重することにほかならない。

というように変化している。

### III 長崎の方言

全国的に方言が衰退していると思われる現代、長崎ではどうか。長崎方言の具体例を示すとともに、発表者が行ったアンケート調査（前掲シート4）を示しながら若年層の方言使用率は、高年層の約半分という結果となったことを説明した。

### IV 方言とは何かを考える

その上で、地域や世代差との関係を保つ方言の有効性や地域の歴史文化との関連、標準語と対照させることで共通語と方言の言語感覚の育成や古典語の習得などの利点を挙げ、方言保存を呼びかけた。

#### (参考文献)

古賀十二郎 1934『長崎市史 風俗編』／田中克彦 1981『ことばと国家』岩波書店／水原明人 1994 江戸語東京語標準語 講談社現代新書／安田敏朗 1999『<国語>と<方言>のあいだ』人文書院／安田敏朗 2006『「国語」の近代史』 中公新書／平山輝男、坂口至 1998『長崎県のことば』明治書院／保科孝一 1901『国語教授法指針』／近藤健一郎 2005「近代沖縄における方言札の実態」愛知県立大学文学部論集 国文学科編 53

## 4-2 国語科教育における方言の学習指導（平瀬正賢）

### I はじめに

小・中学校の国語科教材として知られる方言詩「うち 知ってんねん」の作者・島田陽子は、「各地にあるいくつもの、表情ゆたかな方言」を「置き去ったとき、私たちの日本語はやせおとろえる」と述べている。私たちは、身近な生活語である方言とどのように関わっていくべきか。以下、戦後の小中学校における方言の学習指導の展開をふまえて、今後の展望を試みたい。

### II 標準語と共通語、方言

国語科において、標準語と共通語、方言は、それぞれ『国語科重要用語事典』（明治図書）の記載によれば次のように整理できる。すなわち、「共通語」は「現実に行われている日本全国に通じる言葉」であり、「標準語」は「公的に認められた規範的な言葉」、「方言」は「ある社会にのみ通じる言葉」である。

### III 学習指導要領における方言の扱い

次の〔資料 学習指導要領における方言〕に掲げる通り、昭和 20 年代終わりの標準語教育論争を経て、昭和 33 年版の指導要領には「共通語と方言」の記載が見られるようになり、昭和 40 年代後半にはメディアの普及により、共通語の指導は重きを置かれなくなっていった。

### IV 国語科教材としての方言

中学校の国語科教科書では、共通語と方言の意義、用例等を示したコラム型の解説が中心で、各社によって扱いはさまざまである。充実した学習には授業者による補足が必要であり、シンポジストの北村由紀教諭の実践は特筆に値する。

### V 方言の学習指導の今後

新しい中学校国語科の学習指導要領では、第 1 学年に「共通語と方言の果たす役割について理解すること。」という指導事項が位置づけられ、その解説には「方言」の「価値を見直し、保存・継承に取り組んでいく地域もある」と「東日本大震災の被災地域」の取組に言及した上で、「方言が担っている役割を、その表現の豊かさなど地域による言葉の多様性の面から十分理解し、方言を尊重する気持ちを持ちながら、共通語と方言とを時と場合などに応じて使い分けられるようにすることが大切」と記載されている。国語科における新たな方言の指導が待たれる。

### VI おわりに

冒頭の島田の言葉もふまえて、新しい学習指導要領のキーワードの一つとして

注目される語彙指導の面からも、方言との向き合い方を考えていくべきであろう。

(参考文献)

- 滑川道夫編『国語教育史資料第3巻運動・論争史』東京法令出版 1981.4  
 増淵恒吉編『国語教育史資料第5巻教育課程史』東京法令出版 1981.4  
 全国大学教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書 2002.6  
 全国大学教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』明治図書 2013.3

[資料 学習指導要領における方言]

	小学校	中学校	備考
S22	なるべく、方言や、なまり、舌のもつれをなおして、標準語に近づける。	(話しかた)標準語で話す。	
S26	(話すこと)標準的なことばづかいや、正しいまわしで、礼儀正しく話すことができる。		標準語教育論争(S29)
S33	(6年:ことば)必要な場合に全国に通用することばで話すこと。	(1年:ことば)話しことばと書きことば、共通語と方言などのそれぞれの違いを考えさせる。	
S43 S44	(4年:ことば)全国に通用することばとその土地でしか使われないことばとの違いを理解すること。 (5、6年:聞くこと、話すこと:ことば)必要な場合には共通語で話すこと。	(各学年にわたる内容の取り扱い) 共通語については、適切に話すことができるようにすること。	
S52	(4年:言語事項)共通語と方言とでは違いがあることを理解し、また、必要な場合には共通語で話すようにすること。 (5、6年:言語事項)必要な場合には、共通語で話すこと。	(1年:言語事項)話し言葉と書き言葉、共通語と方言、音声と文字、表記の仕方などについて理解し、また、敬語の使い方を身につけること。	
H元	(4年:言語事項)共通語と方言とでは違いがあることを理解し、また、必要に応じて共通語で話すようにすること。 (5、6年:言語事項)必要な場合には、共通語で話すこと。	(2年:言語事項)共通語と方言の果たす役割などについて理解すること。	第20期国語審議会「方言の尊重」(H7)
H10	(5、6年:言語事項)共通語と方言との違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話すこと。	(2、3年:言語事項)共通語と方言の果たす役割などについて理解するとともに、敬語についての理解を深め生活の中で適切に使えるようにする。	文化審議会国語分科会答申(H16)
H20	(5、6年:話すこと・聞くこと)共通語と方言との違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話すこと。	(2年:伝国)話し言葉と書き言葉の違い、共通語と方言の果たす役割、敬語の働きなどについて理解すること。	

## 4-3 附属中学校における授業の実践報告

### 「中学校国語科の授業における方言についての学び」(北村由紀)

#### I はじめに

本校では、昨年度長崎大学の研究企画委員会のプロジェクト「通史的視点による長崎方言をとり入れた郷土愛と国語力を育む中学校国語授業の新規的研究」として大学と共同研究を行った。大学の前田桂子先生のご指導を受け、中学生は自らの方言の実態を知るとともに郷土の歴史や古典との繋がりを知ることができた。

今年度は、「伝統的言語文化としての長崎方言から地域の歴史文化への理解と国語力を深める中学校国語授業の研究」と題してプロジェクトが進められている。

本学会での発表にあたって、日本語について考える単元の実践及び、昨年度のプロジェクトで行った単元を挙げ、方言についての学びを報告することとする。

#### II 本校での授業の実際

##### 1 第1学年実践例

本校の1年生は、後期が始まって11月頃、日本語について考える単元に取り組む。この単元では、作品を読んだり、自分の体験や経験を見直したりして、言葉を多面的に捉え、これからの日本語の在り方について考える。ここで生徒たちの視点の一つとなるのが、方言である。

(1) 単元名 「日本語」を考える ～シンポジウムで考えを深めよう～

(2) 単元のねらい

- 「日本語」や「言葉遣い」等をテーマとした作品を読み、筆者の主張を捉えたり、積極的に話し合い活動に参加したりして、自己の言語感覚を豊かにしようとする。(態度目標)
- 説明的文章や級友の意見に表れる「日本語」に対する考え方に触れることで、言葉が果たす役割や特徴を理解するとともに、自らの言語生活の在り方に対する認識を深めることができる。(認識目標)
- 筆者の主張内容や論の展開の仕方等の特徴を捉え、その工夫や効果について自己の考えをもつことができる。(技能目標)

(3) 指導計画 (全12時間)

1 単元のテーマや学習目標を理解し、学習の見通しをもとう。

「日本語」についての自分の考えを明らかにしよう。

2 作品を読んで、「日本語」について考えよう

3 グループディスカッションで考えを出し合おう。

4 学習成果をまとめ、単元の振り返りをしよう。

(4) 単元の振り返り

単元の終わりに、「単元を終えて今考えること」と題し、360字程度の作文を書かせた。



- 私は日本語は美しいと考える。なぜ、美しいのか。それは、日本語が長い間、変化し続けてきたからだ。例えば、「共通語」。共通語は、各地の方言が組み合わさってできている。昔、交流をするようになった地域同士で、言葉が通じなかったために作られた。その「地域」がどんどん拡大し、今の共通語に至ったと考えられる。このことから、日本語は何度も変化してきたことがわかる。そうすることで、より私たちの生活にあったものとなる。「日本語は生きている」からこそ、時代に順応することができる。そして心情や情景を、繊細に美しく表現することを可能にする。
- 私はこの単元を終えて、昔と今の日本語の文化を大切にしていきたいと思った。方言はその地域独特の言葉であり、共通語はたくさんの地域の人々がわかり合うために作られた文化。そして、流行語は、世代の違いや時代の流れによって生まれた文化だ。もし、この中で一つでも欠けたら、話しにくくなり、逆に日本語の文化が乱れてしまうかもしれない。昔と今をつなぐ日本語の文化を大切にしていきたい。また、「日本語は増えていいのか」ということも考えてみたが、私は日本語は増えてもいいと思う。なぜなら、それも日本語の文化だと思うからだ。日本語は変化し、増えていくものだ。日本語に終わりはない。

(5) 単元を終えて

単元を終えて、生徒たちが抱いた思いは、「言葉は変化するもの」ということだ。その変化は、私たちの生活を豊かにするものであり、必然であったといえる。だからといって全て変化していったよいかというと、そうではない。生徒たちは、日本の伝統的な言葉や意味はもちろん、言葉の「正しさ」「繊細さ」、等は残しておきたいと考えている。

方言も、長い歴史の中で変化しながらも残ってきた地域に生きる人々の言葉である。方言でしか表し得ない心の機微がある。生徒たちは、方言は、その地域の文化であり、生活の必需品であると考えている。そして、地域による方言の違いを楽しんでいる。自分の思いを自由に表現するための方法の一つとして、柔軟に捉えているようである。

2 第2学年実践例（昨年度長崎大学の研究企画委員会のプロジェクト）

(1) 単元名 長崎弁ばさるいてみゅーで ～方言研究レポートを書こう～

(2) プロジェクトのねらい

方言学習を通じて郷土愛を育み、郷土の歴史と古典学習につなげる。

(3) 指導計画（全5時間）

1 長崎の方言について知ろう①（長崎大学 前田桂子先生）

・方言について知る。（長崎の歴史文化、外来語と長崎方言、古語と長崎方言）

・調べ学習のテーマを決めよう。

2 方言について調査し、「みゅーでレポート」を書こう。

3 グループ報告会をしよう。

長崎の方言について知ろう②（長崎大学 前田桂子先生）

(4) 指導の実際

① 第1次 長崎の方言について知ろう

前田先生の授業は、本校授業研究室で行われた。「もっと知りたい！長

崎方言」と題して方言に関心を持たせることを目標に授業が始まった。柳田国男の方言圏論から長崎弁に話が進み、方言は独特の言葉以外にも発音のなまりや単語の形、意味、動詞や形容詞の変化形などの事項を含むことや長崎弁が古典の中央語につながっていること、長崎弁の中には外来語が基になった語もあることを聞き、生徒たちは方言が本当に歴史の流れの中で息づいていることを実感した。生徒たちの関心が高まり、方言についてもっと知りたくなったところで、いよいよ生徒一人一人が方言についての課題を設定し、調査レポートを書くというめあてが設定された。

② 第2次 「みゅーでレポート」を書こう（調べ学習）

生徒たちは、前時の学習で自分なりに興味があることが出てきていたため、課題設定がスムーズであった。課題設定後、調査方法を考え、以下のような課題を設定し、学習を進めていった。

〈生徒が設定した課題〉

- 地域での違い（長崎市内の各町、長崎市と県内各地域、長崎方言と九州・全国各県）
- 世代での違い
- 地形による違い
- 民謡や民話、文学作品の中に見られる方言
- 伝統文化の中に見られる言葉の起源
- 新しい方言（若者の中で使われ方が変わった方言、方言の混ざり方）

大学から配置された書籍や本校図書館の方言に関する書籍を提示し、参考にしながら調査研究を進めた。更に生徒たちは、実際の面談や電話、メール等で積極的に方言の聞き取り調査を行った。

③ 第3次 グループ報告会をしよう 長崎の方言について知ろう②

この授業では、また、大学から前田先生にお越しいただき、レポートを使って4人グループで報告会を行った。1名が発表し、その後質疑応答を行った。多くの生徒が、日常生活の中で自分と他者との言葉の違いに違和感を覚え、驚いたことが調査のきっかけになっているようだった。

(5) 単元を終えて

生徒たちが思った以上に方言に興味を持っており、授業にも調査にも取り組んだ。また、主体的に調査し、内容も充実していた。長崎弁が、はるか昔の人々から現代の私たちにつながり、消えたり形を残したりしながら生き生きと使われていることを実感し、方言に愛着をもつことができた授業であった。

### Ⅲ 終わりに

これらの実践を通し、長崎方言が私たちの生活に欠かせないものであることに改めて気づくとともに、長崎に生きる者としての誇りを感じることができた。日本人として、日本語の課題について考える学びを大切にするとともに、日常語である方言を見直す機会を持つことは、豊かな言葉の使い手となるために、また長崎に生きていく者として、大変重要であると考えている。